
美少年魔法少女『マジカル ポエミィ』

○

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美少年魔法少女『マジカル ポエミィ』

【Nコード】

N9630B

【作者名】

○

【あらすじ】

ちよっぴりトラブルメーカー、魔法のプリンセスことマジカルポエミィが大活躍。

第1話：マジカル ポエミイ出動！

繁華街の隅にある寂れたバー。

煙草の煙が店内を覆い、風景をぼんやりと霞ませている。

そのバーの片隅のカウンターで、煙草の煙をツータールの髪にまとわせながらスコッチの入ったグラスを傾ける存在が居た。

金色のツータール、鋭い眼光、鋼を束ねたような腕、丸太のような足、積み重なった鉄板のような胸板。

二メートルを超える巨体をピンクのフリフリコスチュームに包み、一人スコッチを口に運ぶ。

みんなの夢を守る使命を背負う、マジカル ポエミイその人だった。

マジカル ポエミイがスコッチのグラスを傾けていると、店に小柄な男が入ってきた。

その男は店内を見回し、マジカル ポエミイを見つけると、ニヤニヤしながら近づいてくる。

「旦那、探しましたぜ」

マジカル ポエミイの隣の椅子に座ると、小柄な男はマスターにバーボンを注文した。

「へっへっへ、旦那、ご注文の情報、仕入れてきましたぜ」

マジカル ポエミイはスコッチのグラスをテーブルに置いて男に一瞥をくると、懐のマジカル ステッキに挟んであった一万円札を男の前に置いた。

「へっへっへ、いつもすみませんね」

男はいそいそと金をポケットにしまいこんだ。

「……例のアレですがね、明日らしいですぜ。場所は旦那も良くご存知の場所で」

男がそこまで言うと、マジカル ポエミイは無言のままカウンタ

「から立ち上がり、出口に向かって歩き出した。

手には金に輝くマジカル ステッキが握られている。

「へっへっへ、旦那、またのご利用を」

男の声を背に、マジカル ポエミィは扉を開いて夜の街に消えていった。

第2話：マジカル テレポート発動！

夜の街を歩くマジカル ポエミィ。

ツィーテールの髪が夜風に舞い、原色の衣装がはためく。

見えない圧力に押されたように周りの人々が道を開けていく。まるで無人の野を進んでいるかのようなようだ。

「ポリリン、カリリン、オンチヨコブ」

交差点に差し掛かった時、マジカル ポエミィはマジカル ステッキを振り上げ地獄の歌劇を思わせるような重低音のバスで呪文を唱えた。

するとマジカル ステッキが眩い光を放ち、その光に目がくらんだ乗用車三台が交差点中央でマジカル クラッシュ。

その運動エネルギーを利用して、マジカル ポエミィの魔法のひとつ、マジカル テレポートが発動した。

マジカル ポエミィの体がマジカル ステッキから放たれるやわらかい光に包まれていく。光はマジカル ポエミィの全身を覆った後一際強く輝き、マジカル ポエミィと共にふっと消えた。

高等魔法であるマジカル テレポートはつつがなく成功。マジカル ポエミィは大破炎上する車の中に移動完了した。

既に運転手が逃げた後の車内、マジカル ポエミィは後部座席で火達磨になって座っていた。

「ぬっ……」

表情を変えずにそう呟くと、右腕を無造作に突き上げて車の天井に穴を開け、ゆっくりとした動作で燃え上がる車の上に乗る仁王立ちするマジカル ポエミィ。

「この程度の炎では俺を焼くことはできん」

足元から吹き上がる炎に包まれながらそんな事を言っていたら、

ガソリントankに引火して車大爆発。
大ピンチ。

第3話：マジカル ステッキ紛失！

爆発し、派手に吹き飛ぶ車体。

一際大きな炎の柱が吹き上がり、辺りを圧倒する。

その炎が突然二つに割れ、中からマジカル ポエミイがゆつくりと歩きながら現れた。

「ふむ、なかなかの炎」

もうもうと黒煙が立ち上り、赤い炎が周りを包む車を振り返りながら呟くマジカル ポエミイ。

「だが、魔界の獄炎の足元にも及ばぬ」

そう言って魔法を使おうと、マジカル ステッキを掲げようとしたマジカル ポエミイ。

しかし、その手には先週買い換えたばかりなのに、取っ手部分が指の形に磨り減ってしまっているマジカル ステッキが無い。

どうやら先ほどの爆発のどさくさで無くしてしまったらしい。

「ぬうう……！」

軽く唸り声を上げたマジカル ポエミイは、マジカル ステッキを探しに戻るため、丸太のような足を動かして激しく燃え続ける車へ戻った。

尋常ではない炎に包まれながら、車をひっくり返したり二つに割ったりしながらマジカル ステッキを探す。

常人なら灰になる火力の中、マジカル ポエミイはついにマジカル ステッキを発見した。

マジカル ポエミイはそれを掴むと、高々と天に掲げて呪文を唱えた。

「パップリドッコリフンヘスト。ぬうう！ 来たれ、魔界の暴風『グレートサンズ』よ……！」

マジカル ポエミイが呪文を唱え終わると同時に空を黒雲が覆い、強い風が吹き始めた。

遠くから重く、空気を震わすような地響きが聞こえる。

事故現場にいた人々が音のする方を見ると、巨大な、あまりにも巨大な黒馬が突進してくる様が見えた。

巨大な黒馬は車を踏み潰し、道路をえぐり、ビルを蹴倒しながらやって来ると、マジカル ポエミイを踏んでそのまま走り去った。大ピンチ。

第4話：マジカル ポエミイ危機一髪！

巨大な黒馬は、社会のインフラに深刻なダメージを与えながら走り去っていった。

道路に残された巨大な蹄の跡。

人々が遠巻きに見守る中、蹄の跡のひとつが突然噴火したように爆発、砂煙の中からマジカル ポエミイがゆっくりと立ち上がった。

「ぬうん！」

気合一闪、周囲に舞う土埃を闘気で一気に振り払うマジカル ポエミイ。

「ぬう……？」

違和感に気付いて頬の辺りをさすると、その指には赤い液体がにじんでいる。

無敵要塞と呼ばれるマジカル ポエミイの肉体に傷がついていた。

「ぬうう、おのれグレートサンズめ……俺の肌に傷を……」

眉間に皺を寄せ、唇を歪ませたマジカル ポエミイ。

「奴め、調子に乗りおって……まあ、いい、かわりにあやつを呼ぶか」

ひん曲がったマジカル ステッキを力強く掲げ、重厚なバスで呪文を唱える。

「むうん……！ ペンコロコンポロチンコロリン、我の元に来たれ、魔界の暴風『ヒステリックマム』！」

マジカル ポエミイが呪文を唱え終わると同時に空が黒雲に覆われ、強い風が吹き始めた。

遠くからまた地響きが聞こえてくる。人々は不安そうな表情で音のする方向に視線を向けた。

巨大な黒馬が、車を、道路を、ビルを蹴散らしながら走って来るという、悪夢のような光景が再び展開されていた。

巨大な黒馬は、マジカル ポエミイの居る所までやって来ると、

何度も念入りに踏みつけてそのままどこかへと走り去った。

後に残されたのはすり鉢状になった道路と、たくましい背中だけ出して地面に埋まったマジカル ポエミィ。

大ピンチ。

第5話：マジカル 使い魔大活躍！

僅かな時間の間にすっかり荒野と化した交差点。

大きく陥没した道路の中央、マジカル ポエミイが土の中からゆっくりとした動作で立ち上がった。

「ぬうつ……もはや是非も無い」

マジカル ポエミイは、もはや原形をとどめていないマジカルステッキを振り上げると、魔法の呪文を唱えた。

「カカリンココリンチンコロリン、来たれ、地獄の下僕『モヒカンデイズ』よ！」

マジカル ポエミイの呪文が終わると同時に空の一部が黒く濁り、マジカル ポエミイの周囲が黒く染まる。その黒い空の一角が裂け、一筋の光が交差点の一角に降り注いだ。

光の中から何かが段々と形をあらわにしていく。

大きく、無駄に剛健な佇まいのバイク。モヒカンで肩パッドと棘のついた皮のジャンパーを着込んだ複数の人間の影が段々と明確な形を取る。

光はついにはつきりとした形を成し、それらはマジカル ポエミイに向かって走り出した。

「ひやははははは！」

「皆殺しだああ！」

物騒な集団はマジカル ポエミイの前に来ると、全員一斉に停止した。

「ポエミイ様、バイクが生き残っております。どうぞお乗りください」

「それよりも魔界の暴風だ。奴らを始末しろ」

「しかし……奴らがどこに行ったのかが分からなければ……」

「案ずるな、奴らは必ず帰ってくる」

マジカル ポエミイが不敵に笑いながら断言すると、辺りが突然

暗くなり、風が強くなった。

凄まじい轟音、人々が驚いて音の方を見ると、巨大な黒馬二頭が並んでこちらに走って来るのが見えた。

巨大な黒馬二頭は、マジカル ポエミイとモヒカン達が居る所を交互に何度も何度も踏みつけた後、並んでどこかに走り去った。

大ピンチ。

第6話：マジカル タクシー急停車！

魔界の暴風が去り、静まり返った交差点。

まるで大規模な戦闘が行われたかのように荒れ果てた風景が広がっていた。

根本を残して崩壊したビル。倒れて潰れた信号機や電柱。

そして隕石が落下して出来たクレーターのようになった道路。

その中央から、突然砂の柱が立ち上がる。

砂の柱から、ボロボロに擦り切れたフリフリでピンクのコスチュームをまとったマジカル ポエミイがその巨躯をあらわした。

「ぬう……下らぬ時間を過ごした」

マジカル ポエミイはそう呟くと、移動のための足を求めてツィールの髪をゆらしながら歩き出した。

マジカル ポエミイは小一時間ほど歩いて車通りの多い街中にたどりついた。

ざわめく夜の街も、二メートルを越える巨体をピンクでボロボロのフリフリコスチュームをまとったマジカル ポエミイが進む先から静まり返っていく。

マジカル ポエミイの鋭い眼光が周囲を威圧する。物理的な圧力さえ感じられる眼光に、人々は声を出すことも出来ずにただ後ずさる事しか出来ない。

そんな人々を無視して大通りに辿り着いたマジカル ポエミイは、走ってきたタクシーを片手で掴んで止めると、後ろのドアをもぎ取って後部座席にその巨体を無理矢理押し込んだ。

「城之内小学校まで頼む」

運転手に腹の底に響きそうな重低音で行き先を告げるマジカル ポエミイ。

突然の出来事にしばらく固まったままだった運転手は、正気に戻

ると状況を総合的に分析して妥当な判断を下し、車を発進させてそのまま最寄の警察署に駆け込んだ。
大ピンチ。

第7話：マジカル 黒騎士急降下！

車は何事も無く警察署に到着。

運転手は出来るだけ不審に思われないうちにつけながら、ごく自然な動作で車から降りて警察署の玄関に向かって歩き出した。

マジカル ポエミイは知らない建物の中に入っていく運転手を後部座席からただ見つめている。

「……………」

運転手が建物の中に入って五分としないうちに、警察官が数人飛び出してきてマジカル ポエミイの乗ったタクシーを包囲した。

「抵抗せずにおとなしく出て来い！」

拳銃を構えた警官がマジカル ポエミイに向かって叫ぶ。

マジカル ポエミイは自分が罠にはめられた事をようやく悟った。後部座席のマジカル ポエミイの唇の端が少しつりあがる。

「ふん……よかろう。罠など食い破ってくれろ！」

マジカル ポエミイは車の天井と床を無視して立ち上がると、周りを囲む警官を睨みつけた。

タクシーの天井からは肩から上、床からはごつい足が突き出ている。

「て、手を上げておとなしくしろ！」

警官の言葉にマジカル ポエミイは無造作に手を振り上げた。

衝撃波が駆け抜け、警官達は尻餅をついた。背後の大きな音に警官達が振り向くと、拳の圧力で警察署の壁が一部崩れていた。

マジカル ポエミイは引きちぎったサイドブレーキのレバーを掲げて呪文を唱える。

「ポポペン、ポポピン、スッダガルダ。ぬうつ……！ 来たれ！
地獄の黒騎士『セブンスヘブン』よ！」

マジカル ポエミイが呪文を唱え終わると、空を黒い雲が覆い、雷鳴が轟いた。

空一面の黒雲が割れ、中から黒い馬とそれに乗った黒い鎧で全身を覆った騎士が姿をあらわした。

黒い騎士は黒く禍禍しい大剣を振り上げ、黒い馬は蹄を打ち鳴らしながら自由落下。そのまま地面に激突してミンチをあたりに撒き散らした。

大ピンチ。

第8話：マジカル ソンビ大復活！

肉片が飛び散り赤く染まった警察署前。

誰もが腰を抜かして座り込む中、タクシーを着たマジカル ポエミイのみが一人悠然と立っていた。

マジカル ポエミイは腰を抜かした警察官達に一瞥をくると、タクシーを着たまま警察署の敷地から門を通ってそのまま外に出て歩き出した。

堂々と道路を歩くマジカル ポエミイ。

人間がタクシーから頭と足を出して道路を歩く姿を見た通行人や車の運転手がビクリして警察に通報。しばらくの後、警察の威信をかけたパトカー十数台が、道路中央のマジカル ポエミイを包囲した。

タクシーを着込んだマジカル ポエミイが動じる事無く周囲を見回す中、包囲したパトカーから銃を構えた警官達が出てきて扉を盾にマジカル ポエミイに銃口を向ける。

「そこを動くな！ ゆっくりとタクシーを脱いで地面に伏せろ！」
拡声器から恐れと自らを奮い立たせようとする意思が入り混じった声が響く。マジカル ポエミイは多数の銃口をその鋭い目で睨み、唇を吊り上げて笑った後、タクシーをちぎって脱ぎ捨てるとサイドブレーキのレバーを掲げて呪文を唱えた。

「ベントラベントラスツポンポン。この地に眠る死者よ、我に力を貸せ！」

空がいつものように黒い雲に覆われ、生ぬるい風が吹いて警官達の頬をなでた。

一方その頃、騒動の中心から300キロほど離れた通夜中の葬儀会場で、三田豪三郎（享年81）が棺を突き破って復活。喪主の三田義之（59）がショックで倒れて入院した。

大ピンチ。

第9話：マジカル 発砲超危険！

生ぬるい風が道路沿いに流れていく。パトカーと警官達が占領する道路はしばし静寂に包まれた。

何が得体の知れないことが起こるのではと警戒していた警官達は、特に状況に変化がない事を確認するとようやく落ち着きを取り戻し、パトカーのドアを盾にマジカル ポエミィに銃口を向けた。

「おとなしくしろ！ いますぐ両手を頭の上に組むんだ！」

マジカル ポエミィが声を出した警官の方へゆっくりと向きを変えた。

マジカル ポエミィの視線に晒された警官は、凄まじい圧力を感じて体が内側に圧縮されるような錯覚を覚えた。体全体が小刻みに震えだし、呼吸もままならない。その凄まじい重圧に耐え切れなくなった警官は、構えていた銃の引き鉄を引いてしまった。

乾いた音と共に発射された弾丸は、マジカル ポエミィの顔に到達する寸前、人差し指と親指の間にはさまれていた。

マジカル ポエミィの指からは、煙が立ち昇り何かが焦げるような音が聞こえる。

放心状態の警官を尻目に、マジカル ポエミィはつまんだ弾丸をそのまま指で押し潰した。

あまりの事に警官達がたじろいだ次の瞬間、包囲網の一角のアスファルトをぶち破って、三田豪三郎（81歳。素晴らしい闇の力がわしの身体に流れ込んでくる。もはや昨日までのわたしではない。見ておれ魔界の魔王ども、地上をそのまま地獄に変えてくれる。おお、わしは今理解した。大地は意外と硬い。体がボロボロじゃ。ばあさん、今そっちに行くぞ）が現れてそのまま動かなくなった。

大ピンチ。

第10話：マジカル ライトニング炸裂！

意味不明な展開に総崩れになりそうな警官隊。

しかし、強靱な意志とゆるぎない正義感で立ち上がった男がいた。
「みんな落ち着け！ 俺達は市民を守る警察なんだ！」

山田巡査部長は思考停止状態におちいった仲間達を鼓舞し、態勢を立て直してマジカル ポエミイに対峙した。

警官達が団結を取り戻した頃、マジカル ポエミイは屈強な肉体を駆使して何かの踊りを踊っていた。

腕が舞うたびに風を切ってブオンと唸り、足が振り回されるたびに地面が振動して警官達をひるませた。

「我が真の力を見せてやろう」

マジカル ポエミイはそう呟くと、新 マジカル ステッキ（サイドブレイクレバー）を自らの肩に突き刺した。

「天雷よ来たれ！ 今こそ真の力目覚めよ！」

マジカル ポエミイが叫ぶと同時に、空を覆う黒雲から雷鳴が轟き、特大の雷が大気を引き裂いて落下、山田巡査部長に命中した。

真の力が目覚めた山田巡査部長は、額から春の芽吹きのように角が生え、肌は恋する乙女の頬のように赤く染まり、身体はダンブ力ー並に巨大化した。

山田巡査部長（元）は雄叫びをあげると、近くにあったパトカーを掴んでは放り投げ、掴んでは放り投げてさあ大変。

あまりのことに警官達は恐慌に陥り、無闇に銃を乱射。

流れ弾で怪我をしたり、流れパトカーで大怪我をしたりと現場は収集不能の大混乱に陥った。

一方その頃、ショックで病院に担ぎ込まれていた三田義之（59）

の元に三田豪三郎（81歳。自力で帰還）と3年前に逝去したはずの三田千代子（三田豪三郎の妻。享年75）がお見舞いに訪問。

あまりのことに心臓がビククリした三田義之（59）は集中治療室へと運び込まれるのであった。

大ピンチ。

第11話：外伝「医療過誤理論」

ショックで心停止に陥るも、病院のスタッフの懸命の処置でどうにか一命を取り留めた三田義之（59）。

一カ月後、彼は集中治療室から一般病棟に移される事になった。

深夜、三田義之（59）がベッドに横たわり寝息を立てているとそこへ「神の手」を持つと評判の外科医師、藪田衣糧三須尾が現れた。

藪田は三田義之（59）が横たわるベッドに近づくと、その「神の手」を虚空の何かを掴むように上に伸ばした。

「ミタサーン、イマ助ケテアゲマース」

藪田はそう言うと、「神の手」をベッドに寝ている三田義之（59）に向かって振り下ろした。

ドスッ

鈍い音と共に藪田の「神の手」が変な方向に曲がって、藪田は104ポイントのダメージを受けた。ついでに三田義之（59）は150ポイントのダメージを受けた。

「ハアハア、ワタシノ”神ノ手”ガ……ダガ、負ケルワケニハイカナイ。ワガー族ノ誇リニカケテ」

藪田は両手を頭上に掲げた。

「イママデ片手ダッタノガ、両手ニナツテ×2」

藪田は両手を上げた姿勢のまま、病室の窓を開けてその上に立った。

「高サモコレデ×2」

藪田は力を溜め込むように、不安定な窓の上でしゃがみこんだ。

「ヒネリヲ加エレバ、サラニ×2。全テヲアワセレバ、ゼンブデ6バイ。オマエヲ超エル、1200マンパワーウワッ！」

途中でバランスを崩した藪田は、キリモミ回転しながら5階の窓から落ちていった。
大ピンチ。

第12話：マジカル ポエミイ大遅刻！

山田巡査部長の活躍で大混乱の警察を無視して歩き出すマジカルポエミイ。

東の空がぼんやりと明るくなり始めている。朝はもうそこまで近づいてきていた。

マジカル ポエミイの脳裏に、夕べ場末のバーで聞いた小柄な男の声がよみがえる。

『……例のアレですがね、明日らしいですぜ。場所は旦那も良くご存知の場所で』

そう、小柄な男の情報によると、今日の給食にはプリンが出てくるという。

「ぬう……こうしてはおれぬ」

薄明るくなった空を見上げながらマジカル ポエミイは呟き、道路に沿って走り出した。

アスファルトを削りながら走るマジカル ポエミイ。そこへ後ろから大型トラックがのんきに走ってくるのを見たマジカル ポエミイは、トラックの正面から体当たりして強引に止めると、ドアの付近をちぎりとつて中に乗り込んだ。

「城之内小学校まで頼む」

鳩が散弾銃を喰らったような顔をしていた運転手は、大きくへこんだバンパーを見て抵抗が無意味である事を悟ると、おとなしくトラックを発進させた。

早朝の通学路に不釣り合いなトラックがやって来て停車。そこからボロボロのフリフリドレスに巨体を包んだマジカル ポエミイが姿をあらわした。

「ご苦労」

マジカル ポエミイの言葉を聞き終わる前に運転手はアクセルを踏んでその場から走り去った。

通学路に仁王立ちするマジカル ポエミィ。そこへ通学途中の子供達が走ってきた。

「おはようポエミィー、遅刻するよー」

「ぬう……いかん」

子供達とマジカル ポエミィは急いで学校へと向かう。

マジカル ポエミィ達が校門が見える所までやってくると、朝の遅刻撲滅キャンペーン中の校門では先生が門を閉じようとしていた。

「うわわわ、やばい！」

「間に合わないよー」

子供達の声聞いたマジカル ポエミィは、走りながら氣を練って手に集中させると雄叫びをあげながら前方に放った。

「させぬ！ 受けてみよ！ マジカル流奥義万物滅碎！！」

マジカル ポエミィが放った奥義万物滅碎は校門と先生を吹き飛ばし、ついでに教室も二つ吹き飛ばしてバランスの崩れた校舎は崩れ落ちて瓦礫となった。

大ピンチ。

美少年魔法少女『マジカル ポエミィ』 プリティー登校 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9630b/>

美少年魔法少女『マジカル ポエミィ』

2010年10月8日15時31分発行